

[第11回日本語文化学会発表要旨]

川端と古典の世界―「旅」のモチーフをめぐって―

カロリーナ・ネグリ

(1995.12.9 発表)

1. 『しぐれ』と中世の「旅」

川端は昭和24年の「文芸往来」1月号に『しぐれ』を発表した。そこには、冒頭に仏典を引き、さらに芭蕉の『笈の小文』と宗長の『宗祇終焉記』を共感をもって長く引用している。

また、『独影自命』（「川端康成全集」昭和23年5月）に、

敗戦は私にもいささかそれに通じる凄寥を深めさせた。私は自分を死んだものともしたやうであった。自分の骨が日本のふるさとの時雨に濡れ、日本のふるさとの落葉に埋もれるのを感じながら、古人のあはれに息づいたやうであった。

と述べている。敗戦に大きな衝撃を受けた川端は、時雨に人生の空しさと戦後の虚脱感に通じるイメージを見いだしたのである。時雨は宗祇と芭蕉の愛したものであった。そして、二人の厳しい詩魂と生涯を追懐することによって、自らの衰え弱まった心を鼓舞しようともしていた。『東海道』（「満洲日日新聞」昭和18年7月20日）に、

芭蕉と宗祇とでは太平の世と戦の世とで、その生もその旅も、おのづからちがつてゐるが、そのちがひよりも二人が同じ漂泊の思ひ、風雅の道一筋の貫道こそは、尋常のことではなかった。

と述べている。川端は、宗教から芭蕉に至る中世連歌師の系譜のなかに、旅、あるいは流離漂泊による芸術一筋の生き方を発見していたのである。

2. 日本文学に流れる「旅」のモチーフ

放浪や漂泊は、宗祇と芭蕉に限ったものではない。中世以前も以降も、「旅」

は価値あるものと考えられてきた。それは日本文学のなかにおいて、重要な役割を果たしていた。

古く万葉の時代から、「旅」は精神の再生の術であった。

家にてもたゆたふ命波の上に浮きてしをれば奥処知らずも（巻17・3896）

について、中西進氏は「これは彼一人の経験ではありません。多かれ少かれ、当時の人は旅に出るとこのような命のたゆたいを感じていたようです。これこそが旅の詩を生み出す源泉になる．．．」と述べている。

平安時代になると、「旅」のモチーフは『伊勢物語』に現れる。

昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらし、あずまの方に住むべき国求めにとて行きけり。（9段）

藤原の時代に生き在原業平は、由緒正しき出自にもかかわらず、栄耀栄華を諦め、東国へ旅立った。彼は、あきらかに恋と詩を求めて、都を捨てたのである。ここに中世、近世、現代へつながる放浪詩人の原点があった。

中世は、宗祇、芭蕉を初めとした漂泊人が輩出した時代であった。彼等の犠牲にしたものも少なくない。社会や家庭、人との付き合いを捨て去るのみならず、一命、生涯を賭けねばならない。そこには、いわゆる常識人にはない強さ、たくましさがある。しかし、同時に、人知れない悲哀、苦悩、孤独もあったにちがいない。

松の葉におなじ世をふる時雨かな

という句には、松の古木に比べて、時雨に惨めに右往左往する自己の姿の寂しさを感じる宗祇が見える。

世間から隔絶された漂泊の詩人たちは、詩の道を自らの命として選び、生きかけたのである。

### 3. 川端と「旅」のモチーフ

『万葉集』の歌から、『伊勢物語』、そして宗祇の俳句に至るまで、「旅」

がもつ思想上の中心的な意味は、永遠に流動してやまない新鮮な眼をもって総てのものを見るという点にある。そのような眼をもって旅の道程に出発するためには、過去および現在までのすべての関わりを放棄しなければならない。

そして、その応用によって自己の生き方が確立されるのである。

宗祇と芭蕉に共感した川端は日本古来の「旅」の意味を受容した。その結果、彼の小説には、「猛々しい世直しの心ときっぱりと決別し、庶凡なるゆえにこそ無垢な心で伸び伸びと生きている人びとの世界に参加する人物」（山下宏氏）が現れる。川端の作品にしばしば登場する「船」や「汽車」や「自動車」は、そのような世界へ入ってゆく媒介となっている。乗り物は、乗客をある地点へ運ぶものである。乗客がそれに身を委ねてしまえば、本人の意思に関係なくいずこへか彼をもたらすものである。つまり、日常的世界からの脱出を象徴するものとなっているのである。

さらに、「トンネル」と「橋」が登場する。これらは、二つの世界を結合させるものであり、同時に、一つの世界を二つに別け隔てるものである。日常世界と非日常世界の存在を象徴しているのであり、「旅」のモチーフをいっそう鮮明なものとするものである。

川端の文学に芸人の登場する作品は少なくない。芸人は、本来、一か所に止まることなく、町から村へと巡り行くものであった。そういう意味で、彼らは古典文学の流れに見られる漂泊の詩人と共通の象徴性をもっている。芭蕉が一所不在をもって「軽み」を得ようとしたように、芸人は放浪することによって精神の自由を獲得しているのである。そのような芸人は、人を閉鎖的な空間あるいは閉じられた人間関係から解放し、精神の自由の体験と新鮮な眼による自己発見への導き手の役割を果たしている。それは「旅」の文学に不可欠の象徴ともいえる。

#### <主要参考文献>

1. 中西進『古典文学と日本人 古典はかたりかける』小沢書店 平6・12
2. 大星光史『漂泊俳人の系譜』世界思想社 平1・12
3. 山下宏「仏教と接点 翻身契機」川端文学研究会編『川端康成の人生と芸術』教育出版センター 昭46・4

(お茶の水女子大学日本文学専攻2年)